通信制高校における
「研究スクーリング」体制の構築についての実践研究

学籍番号　199117
氏　名　中　仁士
主指導教員　寺嶋　浩介

１．背景と目的

2018年度文部科学省の学校基本調査のデータによると、全国の公立通信制高校は独立校・並置校合わせて78校あり、筆者の勤務するM高校も公立通信制高校である。通信制高校には、スクーリング（面接指導）やレポート（添削指導）など、全日制高校とは全く異なる通信制独自のシステムが存在する。実習校であるM高校通信制の課題は、通信制のシステム継承がベテランの口承により行われており、全教員共通の継承にはなっていない。

本教育実践研究の目的は、M高校通信制のシステムの継承である。全日制高校に「研究授業」があるように、通信制高校も「研究スクーリング」を継続的に実施することで、通信制高校教員として意識向上と研究スクーリングを通して通信制高校のシステムを継承できると考えた。

２．実践研究

2.1　2019年度の実践研究（筆者個人の実践活動）

筆者が赴任した７年前は本校1年目の初任者が多く赴任しており、若手教員が研究スクーリングを行い、同教科の教員が研究協議を行う風潮があった。これでは、若手教員がベテランのスクーリングを見学することはなく、他教科のスクーリングを見る機会もほとんどない。そこで、従来の研究スクーリングを大きく見直し、教科に任されていた研究スクーリングを教員経験年数や年齢をもとに４つの班に分けた。さらに強制的にベテランが若手教員を、若手教員がベテランの研究スクーリングを見学することで、互いにスクーリングを学ぶ機会を提供した。

その結果、研究スクーリングに他教科の教員が参加するようになり、研究協議には若手教員とベテランが研究スクーリングの内容について議論し、互いに意見を出し合うことで他者のスクーリングを学ぶことができた。しかし、研究協議を進める中で、全日制の授業と本校通信制のスクーリングは、何が違うのか、教員によってスクーリングの考え方に差が見られた。そこで、2020年１月にスクーリングについてのアンケートを実施した。全教員の82%から回答が得られ、教員間でスクーリングのイメージが異なることがわかった。この結果から、通信制高校のシステム継承として、スクーリングの共通理解が必要であると考えた。

2.2　2020年度の実践研究（研究スクーリングプロジェクトチームの実践活動）

2020年度は、研究スクーリングの運営に協力してくれるメンバーを募集し、6名の協力者と一緒に「研究スクーリングプロジェクトチーム」を立ち上げた。前年度の課題より、教員間のス

クーリングの共通理解を図るため、教員研修を計画した。教員研修では、「スクーリング時における教員の工夫」、「生徒とのコミュニケーションの方法」などを話し合い、互いに学び、共通理解することを目的とした。さらに、教員研修で得られた多くのデータを2020年度の研究スクーリングに活用できるよう、チームで検討した。その結果、見学する教員の視点を明確にするため、研究スクーリングに「スクーリングテーマ」を設定し、研究協議ではスクーリングテーマについて議論できるようにした。スクーリングテーマは、研究スクーリング実施者の負担にならないよう、「Ａ：先生から生徒にうまく伝える工夫」、「Ｂ：先生と生徒のコミュニケーションの工夫」、「Ｃ：その他の工夫」から選べるようにした。スクーリングテーマを指導案に記入することで、見学する教員も教科に関係なくテーマを基に見学することができ、研究協議もテーマについて議論することができた。

2020年度はコロナ禍のため、すべて順調ではなかったが、年度末に研究スクーリングを冊子にまとめ、記録に残すことができた。さらに冊子を全教員に配布することで、研究スクーリングに参加できなかった教員にも研究スクーリングがどのようなものであったか理解させることができた。

2.3　2021年度の実践研究（新研究スクーリングプロジェクトチームの実践活動）

2021年度も研究スクーリングをチームで運営すること（2020年度と比較するため名称を新研究スクーリングプロジェクトチームとする）となったが、有志教員だけでなく、本校1年目の教員も加わったので14名に増えた。2021年度の課題は、研究スクーリングに全教員を参加させることであった。そこで、従来の研究スクーリングではなく、教員研修の一環として全教員が参加（実施者1人と残りは生徒）する模擬研究スクーリングを３つ計画・実施した。その結果、ほぼ全教員が参加したので目的は達成した。また、2021年度は、新しく若手教員向けにレポート添削研修も行った。

３．まとめと課題

3.1　研究スクーリングにおけるシステムの継承

通信制のシステムの一つであるスクーリングについては、研究スクーリングの企画（P）→研究スクーリングの実施（D）→年度末に研究スクーリングアンケート調査（C）→アンケート結果から課題を発見し、次年度に実践する（A）という年度周期の PDCA サイクルが構築され、今後、継続的に研究スクーリングの改善を行うことになり、全教員に継承することができる。

また、2020 年度より、年度末に冊子を作成し、研究スクーリング及び研究協議の記録を残した。この冊子は、新しく本校通信制へ転勤してきた教員に向けて、スクーリングを説明する基になり、初めにスクーリングを共通認識させることができると考えられる。

3.2　有志教員チームによる実践活動の充実

2020 年度より、研究スクーリングに興味のある有志教員が集まり、研究スクーリングの課題を議論することで、研究スクーリングの内容が改善された。また、個人よりチームで活動するほうが、計画的に活動でき、教員研修などでスクーリングに対する教員の意識に変化がみられた。さらに研究スクーリングに協力する新メンバーが加入することで、模擬研究スクーリングだけでなく、レポート添削など発展的かつ継続的な活動をすることができた。